

明けましておめでとうございます。

お正月を、特別な感慨かんがいをもってお迎えになられる方も多いと思います。それは、年あらたが改まることをきっかけとして様々さまざまな事柄がリセットされ、新たな良きご縁のめぐりあわせが期待できるからかもしれません。初詣はつもつでに出かけたり、普段身に着ける機会の少ない和服を着たり、おせち料理を食べたり、お年玉を頂いたりという楽しみも、その思いを反映させているのだと思います。

修行道場でもお正月にはさまざまぎょうじな行持が行われます。道元どうげん禅師は、お正月を単なる特別な時として過ごすのではなく、修行の一環いっかんとして捉え、お正月の“特別”とはどういうことなのかを修行僧たちに考えさせようとしてしました。

お正月に修行僧たちを前にした説法の中で、道元禅師は昔の中国のある逸話を取り上げました。「新年のはじめにあたって、あらたまぶつぼうった仏法というものはありますか？」という問いを修行僧から受けた二人の禅僧が、一人の禅僧は「ある」と答え、もう一人の禅僧は「ない」と答えましたが、二人の禅僧はその質問自体に不満を示したという逸話です。ところが道元禅師は、むしろこの問いをはっ発した修行僧を高く評価したのです。その上でなぜ自分が評価したのかというところを、その場にいた修行僧たち自身さんきゆうに参究してみよと説いたのです。

果たして修行僧たちはどう考えたのでしょうか。お正月だからといってぶつぼう仏法を特別視することに、先ほどの二人の禅僧は不服だったのかもしれませんが。しかし道元禅師は、もし自分が同じように新年の“特別”な仏法の有無を問われたならば、おのおの「各人、皆それぞれが幸せでありますように」と答えるであろうと示されています。

仏教では、損得そんとくや善悪、好き嫌いなどの相対的な考え方に執とらられることをいまし誡めます。それは自分の都合で物事を見ようとする態度だからです。先ほどの逸話の中に出る二人の禅僧が、新年の特別な仏法を否定的に見るならば、あえてその問いを肯定的に見ようとした道元禅師の気概いきがいがうかがえます。

新年は、自らの生き方を仏法に基づいたものへと見つめ直す良いきっかけを与えてくれる時でもあります。お正月を特別視することもしないこともいまし誡めつつ、仏法に基づいた善よい生き方とはどのような生き方なのかを各自が模索し、実行に移すきっかけとする意味で“特別”な時になって欲しいという道元禅師の願いがあったのではないのでしょうか。そこには、道元禅師の願う幸せの形が垣間見えて来るようです。

— 終 —